

1 本校が捉える活用する力とは

本校では、一人で悩むのではなく、友達の意見を聴きながら、自分の考えを深めていく「学び合い」の授業を実践している。人と人が支え合い、助け合って生きていく上で、他者の良さや違いを認め、寄り添うことができる人は、周りからも信頼される。そのような大人になるために、授業では学習内容を理解することはもちろん、友達とともに学び合う中で、人と関わる力を身に付けさせたい。

生徒アンケートをみると、9割弱の生徒が学び合いの授業は理解できると答えている。また、『学び合いを通して自分にはどんな力が身に付いたと思いますか』という問いに対して、「人の話や意見などをよく聴いて、それに対して自分はどのように考えるのか、どういった表現をするべきなのか振り返ることができた」、「考える力を身に付け、鍛えることが自然とできた」、「他の人と自分の意見を比べてみて、間違ったときにどうしてそうなるのかを考えようと、自分から問題に取り組んでいく姿勢をもつことができるようになった」などの回答があった。

そこで、本校では【活用する力】を下の2つに分類した。

- ① 基礎的な知識・技能を使用して、課題解決を行う力
- ② 身に付けたことを実生活に利用する力

生徒の回答にもあるように、学び合いの授業を通して、これらの【活用する力】を育むことができると考えている。具体的には、根拠を明確にして、自分の考えをもつ姿（思考力）、問題解決に必要な条件や情報を選択している姿（判断力）、問題解決の方法や理由を表現する姿、友達の考えを読み取り説明している姿（表現力）を授業の中でみとることができるように、校内研修等をすすめている。

2 公開授業指導案

3年3組 国語科学習指導案

平成27年11月6日（金）5校時

（指導者）金田 博文

（1） 単元名 いにしえの心と語らう 夏草～おくのほそ道～

（2） 指導の立場

生徒は、これまでの古典学習で、その作品の歴史的背景に興味をもったり、仮名遣いや文章の特徴に気付いたりしながら、その文章に表された古人のものの見方や考え方に中学生なりの感じ方で触れてきた。音読活動に多くの時間を充て、名文暗唱も取り入れ、とにかく古典に慣れ親しませることを学習の中心においてきた。しかし、今回の指導過程では新たに、言語活動の充実を意図し、教材文章の理解を土台とした修学旅行作文を書くことにチャレンジさせてみたいと考えた。コンクール応募の作文や、授業・宿題での書く活動の取組ぶり

を振り返ってみると、本学年の生徒の中には、文章を工夫したり練り上げていったりする意欲や粘り強さが十分ではない生徒も多い。推敲の学習経験もあまりなく、虚構を取り入れて文章を書くような楽しみを味わったことのある生徒は小説家志望の生徒しかいないと思う。

そんな生徒たちに、「おくのほそ道」で最も感じさせたいことの一つは、芭蕉の文学にかける執念のような思いである。文学史上、屈指の名文とされているこの教材は、芭蕉の俳諧や旅に対する純粋な思いを虚構も交えてロマンチックに表し、執筆過程で幾度も推敲がなされた点にも、一つの言葉に敏感であろうとする態度を生徒に学ばせることのできるものであろう。また、今回の古典学習を通して、日本文化の中に脈々と息づいている美意識や価値観に触れることは、日本に生きる自分自身や現代の社会を見つめ直す上で、有益であると考えられる。芭蕉の生き方が示されたこの文章に、魅力を感じたり共感したりする生徒もいるとみている。

そこで、ひととおりの読解学習を終えて、第四次では、芭蕉の文章を高めようとした執念のうち、「織り交ぜられた虚構」「重ねられた推敲」「文章と、思いを凝縮した詩の融合」の3つにポイントを定め、真似をして自分の作文を書き、他者の推敲も経て発表し合う活動（学びにおける他者活用）に入るように学習を構成した。その活動により、「おくのほそ道」における芭蕉の文章に、よりいっそうのドラマチックさを生徒は感じられるし、彼の文章における工夫を整理でき、知識と読みも深まっていくのではないだろうか。次時で他者推敲を取り入れたのは、他学習者の文章を高める責任と貢献への意欲が生まれ、お互いのよさを認め合える授業づくりを意図しているためでもある。

(3) 指導過程（総時数10時間）

第一次 「おくのほそ道」との出会い

芭蕉の生きざま（旅に生きて、芸術に生きる）・・・・・・・・・・1時間

第二次 「旅立ち」の読解と暗唱・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間

第三次 「平泉」の読解①・・・・・・・・無常観と人間讃歌・・・・・・・・・・3時間

第四次（活用に主眼をおいた第四次）・・・・・・・・・・・・・・・・4時間（本時3／4）

第四次の主眼

松尾芭蕉の文学にかける執念を学び、それに触発され自分に取り入れて、簡単な文章を書く活動を通して、本文の読解学習に終わるのではなく、工夫しながら言語活動を充実させて生活するように高まる。

① 芭蕉の「推敲の跡」と、「文章と詩の融合における相乗効果」について

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応	教師の支援
○ 推敲によって文が研ぎ澄まされていった跡を追い、必要性	・ 既習事項で「閑かさや」「最上川」の句が推敲された跡を思い	・ 「五月雨や年々降るも五百たび」の句を提示して、「五月雨の降り残してや

<p>を実感する。</p> <p>○ 文章と詩の相乗効果を感じる。</p>	<p>出すと思われるが、その事実のみを知っているだけで、その効果にまで考えが及んでいないであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 書き手の思いをキュッと凝縮したような詩（芭蕉の句）に対して自分たちが作成した修学旅行ブックにおける「写真」のような効果を捉える生徒もいるかもしれない。 	<p>光堂」と比べさせ、芭蕉の思いや、推敲の効果について話し合わせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「もし俳句がなかったら、どんな感じか」または「俳句だけがならんでいたら」を考えるきっかけとして話し合わせることにより、文章に込められた思いを詩が顕わにし、また、詩の情景を文章がくわしくイメージさせる効果を感じ取らせる。
---------------------------------------	---	---

② いったん修学旅行作文を書いてみて、他者の見方・意見をきく。

③ 「虚構の挿入」について（本時）

④ 他者推敲も取り入れて自分の文章を吟味し完成させ、小グループで発表し評価し合う。

（４） 本時の主眼

虚構を挿入した芭蕉の思いにふれることを通して、虚構手法を用いて文章を変化させる楽しみを味わうことができる。

（５） 準備

「楚良日記」の一節、宿題になっていた各自の修学旅行作文、ワークシート

（６） 学習過程

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応	教師の支援
<p>ウォーミングアップ 「平泉」「旅立ち」の斉読や現代訳対応 暗唱 (開始5分前活動)</p>	<ul style="list-style-type: none"> うまくできれば、本時に取り組むモチベーションも上がるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習の、生徒にとってある程度自信の持てる課題を発声させることにより、気持ちの解きほぐしを図る。
<p>本時の＜めあて＞の提示 芭蕉の、文章を高めたいとする執念と工夫をもう一つ取り入れて、自分の修学旅行作文を変化・アップさせよう。</p>		

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応	教師の支援
1	<p>【共有の課題】 楚良日記と芭蕉の文章を注意深く比べて、違和感を覚える点を見つけよう。 ～楚良日記の提示から、虚構挿入の発見～</p>	
2	<p>虚構を取り入れた芭蕉の意図や、その効果について話し合う。【4人組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「経堂は見られませんでした」と書くよりも、光堂の方を比較の中で際立たせたいから。 ・ 晴天よりも、雨が降っていた方が、光堂の輝きや光堂への感動が、ロマンチックだから。 ・ 自分の思いや感じたことを、より濃く映し出した文章へと高めるため。 ・ ドラマチックにしたいから。 ・ 自分の理想とする「平泉の世界」を文章の中で味わいたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共有の課題を基にして（経堂が開帳されていたこと・五月雨の降り注ぐ光堂であったこと）考えさせる。 ・ 既習事項（芭蕉の人間観と無常観）をなぞることで、平泉の文章に虚構を求めた芭蕉の思いに導きたい。 ・ 平泉の文章は「風景」のみならず「情景」であることを押さえる。
3	<p>【ジャンプの課題】 自らの作文に着手する。</p> <p>【個別の学習時間】 構想がまとまったら、作文の骨組みを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どう取りかかったらよいか、分からない。手を付けられない。 ・ ただの日記風の文章にしかできない。 ・ 課題に対する自信が持てず、仲間（他の生徒）の発表をガイドラインとしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワンシーンを思い浮かべ、まず、強調したい（膨らませたい）ことや用いたい虚構の内容を考えるようにアドバイスする。次に、詩（俳句）を変化させる。それらを数名に発表させる。 ・ 難しいと思われる課題だが、取り組めない生徒を教室の一角に集めて、「あなたの作文に、先生だったらこういう虚構を盛り込む」のアイデアを例示できるとよいと考えている。
<p>「虚構」の取り扱いについて、注意すべきこと</p> <p>① 自分の文章は、虚構で加味した方が効果的なのか、不要なのか、よく吟味する。</p> <p>② 「何でも、嘘でも書いていいんだ」という感覚になることがないように、自分の言葉に責任をもつ態度をもたせる。</p>		
<p>本時の＜振り返り＞場面の変わりとして</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文章を変化させる楽しみ（①虚構 ②他者のアドバイス）があったか、ワークシートに記入させる。 		

(7) 評価

- ・ 「虚構を交え」たり、「推敲を重ね」たり、「詩を挿入し」たりする手法を体験し、文章創作の楽しみを味わえたか。（書く）
- ・ 芭蕉の創作への執念を、改めて確認できたか。（読みとる）
- ・ 次時の、他者の生み出す文章を楽しみにしているか。（関心・意欲）

3 授業後の考察

本時の授業は、「既習のことから新しい観点を取り出し、それを活用させていく力」を磨くように意図した。古文の中からヒントを得て、現代文である自分の作文を手直しするという学習内容であったが、古文の中から得るヒントが「虚構」ということで、参観していただいた先生より次の2点のアドバイスを受けたので、今後に生かしたい。

- ① たとえば、紀行文、俳句、説明文、小説…など、「虚構」を扱うときには、どのような場合にどの程度扱うのがよいのか、使える場面を教える必要がある。
- ② 「虚構」を取り入れるときの文章の目的（おもしろくするのか、美しさを伝えるのか、事実を印象的に伝えるのか、など）をはっきりさせた上で推敲させる方が、文章の何がよくなったのかが評価しやすい。

また、授業中の場面についても、次の3点が反省点としてあがる。

① <前半>「虚構」に気付かせる場面

芭蕉の文章だけでなく、楚良の文章も前時までによく読み込ませ、解説しておく方が、深く突っ込んだ意見が出てくる可能性があった。

② <中盤>「虚構」の良さに気付かせる場面

意見を発表させる際に、「先生対全体」になってしまう。「他にないか」と問うのではなく、再度、班に戻して考えさせる（生徒どうしをつなぐ）方が、生徒各人の中に新たな意見が膨らんだり、自分の意見に自信をもったりできる。

③ <終盤>互いの作文を改良し合う場面

文章とはある程度読み込んでこそ、深い意見交換ができるものなので、初めて聞く文章の一部の改良点をいきなり取り上げても、そのよさを感じるのが難しかった。方法として、推敲対象作品を一つに絞って、班の他者の推敲の結果を聞くことができる方が、実感がわいたであろうと思われる。

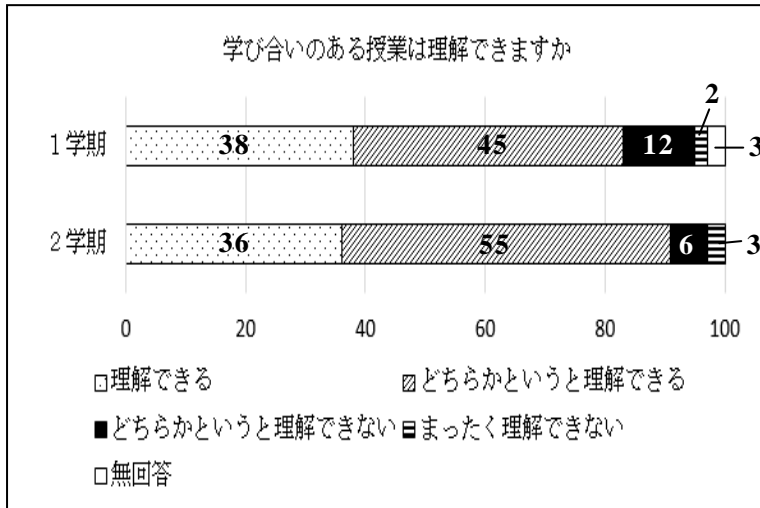
4 研修の成果

○ 活用する力の共通理解

今回の研究では、まずは【本校の活用する力】を校内研修職員会で検討した。教科の特性により多少の差異はあるものの、今年度の本校の研修の柱である「聴く力」と「伝える力」に焦点をあてて取り組むことで、【活用する力】を高めることができるのではないかということにおいて、事前に共通理解することができた。本校では、年に3回実施している公開授業研究会に際し、全教員

が生徒役となって参加する授業検討会を実施している。今回、改めて子どもたちに身に付けさせたい力を共通理解し、他教科の授業に触れ、意見交換することで、教員としての視野を広げ、授業力向上に繋がったものと考えられる。

○ 学校評価生徒アンケートより



学び合いの授業については、1学期末よりも2学期末の方が、理解できると答えている生徒が8%も増えた。互いに考えを交流させる学び合いの授業が生徒の理解の深まりに繋がっていると考えられる。また、難しい課題に挑戦したり、自分の考えを伝え合ったりする中で、既習事項を活用する

力が少しずつ身に付いた結果であるともとらえられる。また、分かる喜びを実感することで、次なる課題への意欲も高まったものと予想される。

○ 全国学力・学習状況調査

今年度の全国学力・学習状況調査では、A問題もB問題も全体として、本校の正答率が全国、山口県の正答率をともに上回り、良好な結果である。特に、B問題の正答率が高く、もっている知識を活用して解答することができている。わずかではあるが、今年度の研究における実践が活用する力の向上に繋がったものと考えられる。また、評価の観点の「国語への関心・意欲・態度」に関わる問題の正答率も、全国、山口県の正答率を上回っていたり、記述式問題の無回答もたいへん少なかったりすることより、理解の深まりが生徒の学習意欲の高まりに繋がっているものととらえられる。

5 今後の課題

今回の研究では、生徒の活用する力の向上については、一定の成果がみられた。しかし、魅力ある課題や教師のあり方など、検討すべきこともみえてきた。今後も教科の本質をしっかりととらえ、生徒が解きたいと感じることのできるようなレベルの高い課題を設定していきたい。また、活用する力を高めるために必要となるグループ活動では、仲の良い友達とだけコミュニケーションをとるのではなく、より活発な言語活動となるように、生徒同士をつないだり、グループ同士の交流の時間を設けたりしながら、授業力の向上に学校をあげて努めていきたい。

